グリューネヴァルト作《雪の奇跡》およびザントラルト著『ドイツ・アカデミー』について

日本大学研究員

大杉　千尋

研 究 課 題　グリューネヴァルト研究

受 入 教 員　芸術教養課程・教授　植月　惠一郎

研 究 期 間　平成31年４月１日～令和２年３月31日

１．研究歴

報告者は2005年から神戸大学文学部、神戸大学人文学研究科に所属し、一貫して16世紀ドイツの画家マティアス・グリューネヴァルト（Matthias Grünewald, c. 1480-1528年）について研究を行ってきた。2018年に学位論文「〈イーゼンハイム祭壇画〉研究」を提出し、博士（文学）の学位を得た。博士論文では、グリューネヴァルトの代表作〈イーゼンハイム祭壇画〉（1512-1516年ごろ、コルマール、ウンターリンデン美術館）について研究を行い、図像の視覚的影響源をさぐるとともに、その形態に込められた意味を、同時代の史料を分析することで明らかにした[1]。また、グリューネヴァルトの一次資料である遺産目録、後述の『ドイツ・アカデミー』に収録されている画家伝についても、翻訳と注解を行った[2]。

博士後期課程修了後１年間は日本大学大学院芸術学研究科の科目等履修生として研究活動を続け、グリューネヴァルトの19、20世紀における評価史について研究を行い、特に1848年から1876年にかけて出版されたシャルル・ブランの美術叢書『全画派の画家たちの歴史』に収録されたグリューネヴァルト伝について詳細に分析を行った[3]。

２．2019年度の研究テーマ

2019年（令和元年）度の活動として、以下の２つのテーマで研究を行った。

①16世紀のドイツの画家グリューネヴァルトによる《雪の奇跡》（1519年、フライブルク、アウグスティヌス会美術館、図１）について

②17世紀ドイツの画家・美術批評家ヨアヒム・フォン・ザントラルトによる著作『ドイツ・アカデミー』（1675-1679年、ニュルンベルク、以下『ドイツ・アカデミー』、図６）について

３．研究内容

以下、それぞれの詳細な研究内容について述べる。

①グリューネヴァルト作《雪の奇跡》について

報告者は、これまでのグリューネヴァルト研究に引き続き、油彩画《雪の奇跡》（図1）[4]について研究を行った。本作品は、1519年にドイツ南部のアシャッフェンブルクの聖ペーター・アレキサンダー参事会聖堂（以下、アシャッフェンブルク参事会聖堂、図２）の「雪の聖母礼拝堂」に設置するためにグリューネヴァルトに委嘱された、〈雪の聖母祭壇画〉の一部をなすものである。同祭壇画は観音開き状になるよう３枚のパネルが連結された、いわゆる三連画の形式をなす多翼祭壇画（図４）として制作されたものである。本作品は右翼パネルに該当すると考えられている。中央パネルである《シュトゥパッハの聖母》（図３）は　バート・メルゲントハイム近郊にあるシュトゥパッハの教区聖堂に所蔵され、左翼は失われた。

ところで、「雪の聖母」の呼称は、ローマのサンタ・マリア・マッジョーレ聖堂創建説話と深い関わりをもっ

1　大杉千尋「〈イーゼンハイム祭壇画〉研究」神戸大学、2018年。

2　大杉千尋「グリューネヴァルトの遺産目録」『美術史論集』14、2014年、(8)-(31)頁；大杉千尋「ザントラルトによるグリューネヴァルト伝（本伝及び補遺）」『美術史論集』16、2016年、119-130頁。

3　大杉千尋「十九世紀のグリューネヴァルト批評―『全画派の画家たちの歴史』中のアウグステ・デミンによる記述を中心に」『イメージ制作の場と環境―西洋近世・近代美術史における図像学と美術理論』近世美術研究会編、東京：中央公論美術出版、2018年、333-347頁。

4　本作に関する主要な先行研究として次のものがある。KRUMMER-SCHROTH, I., "Zu Grünewalds Aschaffenburger Maria-Schnee-Altar". *Anzeiger des Germanischen Nationalmuseums*, 1964, 1964, pp. 32-43; SARAN, B., "Reitzmanns Maria-Schnee-Stiftung und Grünewalds Altar. Humanistisch gesehen," *Aschaffenburger Jahrbuch*, 7, 1981, pp. 263-372; HUBACH, H., *Matthias Grünewald. Der Aschaffenburger Maria-Schnee-Altar. Geschichte - Rekonstruktion - Ikonographie*, Trier: Gesellschaft für mittlalterliche Kirchengeschichte, 1996.

ている。その説話とは、大筋で以下のようなものである。４世紀、ローマの裕福で子供のいない市民が財産を聖堂建設に提供しようと考え、教皇リベリウス（在位310-366年）に相談した。その夜、市民と教皇両方の夢に聖母マリアが顕れ、聖堂を建設すべき場所に雪を降らせると告げた。果たして次の朝、ローマのエスクィリヌスの丘に、夏であるにもかかわらず雪が降るという奇跡が起こった。そこでこの場所に聖母に捧げる聖堂を建設した。この創建説話はおそらく後世の創作と考えられているが、14世紀ごろから、毎年８月５日の「雪の聖母の祝日」がサンタ・マリア・マッジョーレ聖堂で盛大に祝われたことがわかっている[5]。

このテーマに関する先行作例は多くはないが、大型の作品はチェコ、ブルノのシトー会修道院に由来する《雪の聖母の奇跡》（1480年、ブルノ、モラヴィア絵画館）、聖カタリナ伝の画家による《ご訪問》（1480-85年ごろ、ケルン、ヴァルラフ・リヒャルツ美術館、図５）の背景部分など、ごく少数の例外を除いてイタリアに集中しており、そのほかには写本挿絵として相当数の作例があるが、版画作品は稀である。上記説話の中から、教皇が夢をみる場面、聖母が雪を降らせる場面、翌朝教皇が雪の降った場所に鋤を入れ、聖堂建設を始める場面などが造形化されている。

この祝祭は長らくローマ市内だけで限定的に行われていたが、これをアシャッフェンブルクを含むマインツ大司教区に導入したのが、注文主ハインリヒ・ライツマンであった。彼の直属の上長で、グリューネヴァルトの最初の主人でもあったマインツ大司教ウルリヒ・フォン・ゲミンゲンもこの祝祭を認めており[6]、単なる私的な崇敬ではなく、ドイツ聖界トップも関係する大々的な信仰の導入であったことがわかる。ウルリヒの後継者アルブレヒト・フォン・ブランデンブルクも「雪の聖母」崇敬を継続して推進し、ついには教皇レオ10世の認可を得るに至った[7]。アシャッフェンブルクでは、礼拝堂聖堂前の「巡礼広場」の整備も行われ[8]、同市を聖母崇敬の一大巡礼地にしようというアルブレヒトとライツマンの意図が読み取れる。

以上のような状況下で制作されたグリューネヴァルトの《雪の奇跡》（図１）は次のような図様である。縦長の画面の中で、手前に雪の積もった地面に鋤を入れる教皇、左奥には眠る教皇、右奥には建造物が見える。先に述べた先行作例で表された諸場面と比較すると、本作品では教皇が登場する２場面のみが描かれていることが注目に値する。

1517年、ルターによる九十五箇条の論題が提出され、権威が失墜しつつあったドイツの教会政治の状況を鑑みると、ここでキリスト教会の首都ローマから新たな聖母崇敬を導入し、教皇の姿を数多くの巡礼に見せることで、教会の権威を回復させるための運動の一環として機能させようとした意図が理解できる。また、右奥の建物はローマのサン・ジョヴァンニ・イン・ラテラノ大聖堂に比定されており[9]、こちらも教皇ともっとも関わりの深い聖堂の威光を借りようという注文者の意向を反映させたものだと考えられる。

以上のように、グリューネヴァルトの《雪の奇跡》は、アルプス以北ではまだほとんど知られていなかった「雪の聖母」崇敬をマインツ大司教らの主導により導入するという一大プロジェクトの一環として、特に教皇ならびにローマ・カトリック教会の権威を強く意識させる図像が選択され、実現されたものといえる。

結局、その後グリューネヴァルトは新教側に加担した廉でマインツ大司教のもとを追われた。そのマインツ大司教アルブレヒト自身も、新教の広まりにともない本拠地ハレを追われて事実上失脚し、アシャッフェンブルクを「雪の聖母」崇敬の巡礼地とするという計画は挫折した。本作品を含む〈雪の聖母祭壇画〉も解体の憂き目に遭い、現在は分散して所蔵されている。しかしながら、近年アルブレヒト・フォン・ブランデンブルクによる美術振興活動が見直され、新しい研究成果が次々と発表されている中で[10]、本作品も、直接アルブレヒトが注文を

---

5 HÖFER, R. K. / RITTER, E. H., „"Schnee". *Marienlexikon*, BÄUMER, R. / SCHEFFCZYK, L. (ed.), 6, Sankt Ottilien : EOS, 1994, pp. 40-42; VAN OS, H. W., "Schnee in Siena". *Nederlands Kunsthistorisch Jaarboek*, 19, pp. 1-14.

6 HUBACH 1996, p. 251.

7 HUBACH 1996, pp. 254-258.

8 KLEWITZ, M., *Die Baugeschichte der Stiftskirche St. Peter und Alexander zu Aschaffenburg*, Aschaffenburg : Pattloch, 1953, pp. 93-95.

9 SCHMID, H. A., *Die Gemälde und Zeichnungen von Matthias Grünewald*, 2, Strasbourg: Heinrich, 1911, pp. 217-212.

10 Cat. Ex. *Der Kardinal Albrecht von Brandenburg. Renaissancefürst und Mäzen*, 2 vols., Halle: Stiftung Moritzburg, 2006; Cat. Ex., *Cranach im Exil. Aschaffenburg um 1540. Zuflucht, Schatzkammer, Residenz*, Aschaffenburg: Schloss Johannisburg, Kunsthalle Jesuitenkirche, Stiftsmuseum, Stiftsbasilika St. Peter und Alexander, 2007; WOLF, N., *Das*

出したものではないにせよ、彼のメセナの一環として、政治的背景も含めて再検討がおこなわれるべきである。

②ザントラルトの著作『ドイツ・アカデミー』について

ヨアヒム・フォン・ザントラルト[11]による『高貴なる建築・彫刻・絵画のドイツ・アカデミー』[12]中のニコラ・プッサン[13]の伝記[14]（図６、７）に注目し、翻訳と注解を、本学研究員の木村三郎元教授と共同で行った。

ザントラルトのプッサン伝は、ザントラルトがローマで直接プッサンと交際していたこと[15]、ローマでの最初の作品について詳しい記述があることなどから、プッサン研究において重要な一次資料と考えられる。

しかし、ザントラルトの使用するドイツ語が今日使用されている新正書法とは大きく異なっていることもあり[16]、日本での紹介は、数あるプッサン伝の中でも最重要とされるフェリビアンやベッローリのプッサン伝[17]に比べて断片的なものに留まっている。そこで本研究では当該資料の全訳を試みるとともに、詳細な注釈を加えた。

ザントラルトは1606年にフランクフルトに生まれ、プラハ、ユトレヒト、ロンドンなどで修行したのち、1629年から1635年までローマに滞在して画家として活動した。特にこのローマ滞在期には、上述のプッサンの他、クロード・ロラン、ピーテル・ファン・ラールら北方の画家と交流を深めた。また、滞在中はローマで最も大規模

Missale Albrechts von Brandenburgs. Geschaffen von Nikolaus Glockendon - inspiriert von Albrecht Dürer. Die Handschrift 10 der Hofbibliothek Aschaffenburg, Luzern: Quaternio, 2017.

11 ヨアヒム・フォン・ザントラルト（Joachim von Sandrart, 1606-1688年）。ザントラルトのモノグラフとして、次のものがある。KLEMM, C., *Joachim von Sandrart. Kunstwerke und Lebenslauf*, Berlin: Deutscher Verlag für Kunstwissenschaft, 1986; EBERT-SCHIFFERER, S. / MAZZETTI DI PIETRALATA, C. (ed.), *Joachim von Sandrart. Ein europäischer Künstler und Theoretiker zwischen Italien und Deutschland. Akten des Internationalen Studientages der Bibliotheca Hertziana, Rom, 3.-4. April 2006*, München: Hirmer, 2009; MEIER, E., *Joachim von Sandrart: Ein Calvinist im Spannungsfeld von Kunst und Konfession*, Regensburg: Schnell & Steiner, 2012.

12 本書に関する研究として次のものがある。SPONSEL, J. L., *Sandrarts Teutsche Academie kritisch gesichtet*, Dresden: Hoffmann, 1896; SANDRART, J. v., *Teusche Academie der Bau-, Bild- und Mahlerey-Künste*, KLEMM, C. (ed.), 3 vols., 1994-1995, Nördlingen: Uhl (=TA); HECK, M.-C., *Théorie et pratique de la peinture. Sandrart et la Teutsche Academie*, Paris: Maison des sciences de l'homme, 2006; MEURER, S. / SCHREURS-MORÉT, A. / SIMONATO, L. (ed.), *Aus aller Herren Länder. Die Künstler der "Teutsche Academie" von Joachim von Sandrart*, Turnhout: Brepols, 2015.

13 ニコラ・プッサン（Nicolas Poussin, 1594-1665年）。主要なモノグラフとして次のものがある。BLUNT, A., *The Paintings of Nicolas Poussin. A Critical Catalogue*, London: Phaidon, 1966; THUILLIER, J., *Nicolas Poussin*, Paris: Flammarion, (1974) 1994; ROSENBERG, P., *Nicolas Poussin: Les tableaux du Louvre, catalogue raisonné*, Paris: Musée du Louvre, 2015. また、1994年にパリのグラン・パレで開催された大回顧展も研究史上重要な位置を占める。Cat. Ex., *Nicolas Poussin, 1594-1665*, Paris: Grand Palais, 1994.

14 SANDRART, «IV. Nicola Pousin, aus der Normandie». TA II.3, pp. 367-369. ザントラルトによるプッサン伝についての先行研究には次のものがある。KEAZOR, H., "'Rom... ein mit Kunst erfülltes Theatrum'. Joachim von Sandrarts Blick auf Nicolas Poussin". MEURER 2015, pp. 287-298.

15 ザントラルトは1629年から1635年のローマ滞在中、教皇ウルバヌス８世の注文により肖像画や宗教画を複数制作しており、サン・ルカ・アカデミーの講義にも出席していた。TA, Lebenslauf, pp. 8-10. ザントラルトのローマにおける活動については次を参照。KLEMM, C., "Sandrart a Rome". *Gazette des beaux-art*, 93.4, 1979, pp. 153-166; EBERT-SCHIFFERER, S., "Sandrart a Roma 1629-1635: un cosmopolita Tedesco nel Paese delle Meraviglie". Cat. Ex. *Roma 1630 : Il trionfo del pennello*, Roma: Villa Medici, 1994-1995, pp. 97-114.

16 本書が成立した1600年代後半において、ドイツ語は統一の途上にあった。当時のドイツ語圏は領邦の分立、宗教的分裂、上流階級によるラテン語・フランス語の使用など様々な要因によって、未だ正書法の確立をみていなかった。ドイツ語統一の動きは1617年設立の「実りを結ぶ会」（Fruchtbringende Gesellschaft）などの国語協会によって始まったばかりであった。なお、ザントラルトはこの協会の会員であったが、入会は本書主要第一部出版（1675年）後の1676年４月28日である（CONERMANN, K. (ed.), *Die deutsche Akademie des 17. Jahrhunderts: Fruchtbringende Gesellschaft*, 2001-2018, http://www.die-fruchtbringende-gesellschaft.de/index.php?category_id=4&article_id=16, 2020年５月10日閲覧）。また、ドイツ語史については、POLENZ, P. v., *Geschichte der deutschen Sprache*, Berlin: De Gruyter, 1972（1978）（ポーレンツ、P. v.『ドイツ語史』岩崎英二郎他訳、東京：白水社、1974年）；SCHMIDT, W., *Gechichte der deutschen Sprache*, Berlin: Volk und Wissen, 1969（2000）（シュミット、W.『ドイツ語の歴史』西本美彦他訳、東京：朝日出版社、2004年）を参照。

17 複数あるプッサン伝全般の研究については次を参照。BELLORI, G.P./FELIBIEN, A./PASSERI, G.B./SANDRART, J.v., *Vies de Poussin*, GERMER, S. (tr.), Paris : Macula, 1994 ; 木村三郎「ニコラ・プッサンの、パリ在住、二十代の青春—アンドレ・フェリビアンの著作『対話』を物語画制作の視点から読む」『イメージ制作の場と環境—西洋近世・近代美術史における図像学と美術理論』近世美術研究会（編）、東京：中央公論美術出版、2018年、9-26頁。

な古代彫刻コレクションを有したヴィンツェンツォ・ジュスティニアーニ公の邸宅に寄寓し、そのコレクションを版画化した冊子『ガレリア・ジュスティニアーニ』を出版した。その後ドイツに帰国し、1672年にはニュルンベルクに居を定め、1688年に死去するまで、主に絵画理論についての著作に取り組んだ。このような経歴から、ザントラルトは自ら職業画家として絵画制作を実践するとともに、ヨーロッパ各国の様々な芸術家と交流をもち、また古典作品をよく学習し、様々な絵画理論を会得していったと思われる。

一方、プッサンは1624年にローマに到着し、本書でも述べられているとおり1640年から1641年にパリに滞在した他は生涯のほとんどをローマで過ごした。1626年にはすでにサン・ルカ・アカデミーで役職をもっていたことから[18]、ザントラルト到着時にはすでにローマで一定の地位を築いていたものと思われる。ザントラルトはジュスティニアーニ公のためにプッサンが制作した《嬰児虐殺》の模写を残しており、公の庇護を介して２人の画家が親しく交際をもったことを示している（図８、９）。

ザントラルトが晩年に集大成として出版した『ドイツ・アカデミー』は、実体験をもとにした画家伝の部が特に評価されている。本研究で取り上げたプッサン伝は、親密な交際から知り得たプッサンの制作方法についての詳細や、主要な作品とその由来を知ることができる重要な一次資料であり、またプッサンについて書かれたドイツ語では最も初期の文献である。一方で、他のプッサン伝と比較すると、ザントラルトのローマ滞在期と『ドイツ・アカデミー』出版の時期とは数十年の開きがあるためか、いくつかの誤りも認められる。ザントラルトとプッサンが交流をもったのは、1629年から1635年のローマでの６年間のみであり、その後ローマに行かなかったザントラルトがプッサンと直接面会した記録はない。したがって、例えばプッサンのフランスへの一時帰国に関しては年代の間違いなどが認められるのである。それでもなお、ローマ滞在中の若手画家から見たプッサンに関する生の記録という点で、ベッローリやフェリビアンといったプッサンの伝記とともに、画家プッサンについて知るための重要な一次資料であるという点は明らかである。

本資料は、ザントラルトの使用するドイツ語が今日使用されている新正書法とは大きく異なっていることもあり、フランス人画家であるプッサンを研究する研究者の大部分にとっては、読解が困難であった。本研究において、これまでドイツ美術を研究し、16、17世紀のドイツ語一次資料を読解できる報告者と、プッサン研究において世界的にも評価されている木村三郎元教授とが共同で研究を行うことで、従来光の当たらなかった資料について詳細に検討することができた。

４．研究成果

①グリューネヴァルト作《雪の奇跡》について

ドイツでの実作品の現地調査をする機会が得られず、今回は研究内容の発表を見送った。このテーマについては、作品の現地調査およびローマ、アシャッフェンブルクでの文書調査の機会を得て、再度取り組む予定である。

②ザントラルトの著作『ドイツ・アカデミー』について

本研究の成果は、「ザントラルトの見たプッサン―『ドイツ・アカデミー』におけるプッサン伝」と題して、2020年（令和２年）９月発行予定の『日仏美術学会会報』（査読有）にて発表される予定である。

また、報告者は日本学術振興会の科学研究費助成事業（若手）の交付を受けることが内定しており、2020年度も本学で『ドイツ・アカデミー』について研究を続けていく予定である。

---

[18] LA BLANCHARDIERE, N. d., "Simon Vouet. Prince de l'Académie de Saint-Luc". *Bulletin de la Société de l'Histoire de l'art francais*, 1972, 1973, p. 93.

図版

図1
グリューネヴァルト《雪の奇跡》1519年（？）、フライブルク・イム・ブライスガウ、アウグスティヌス会美術館

図2
アシャッフェンブルク参事会聖堂、北正面入り口

図3
グリューネヴァルト《シュトゥパッハの聖母》1519年（？）、シュトゥパッハ教区聖堂

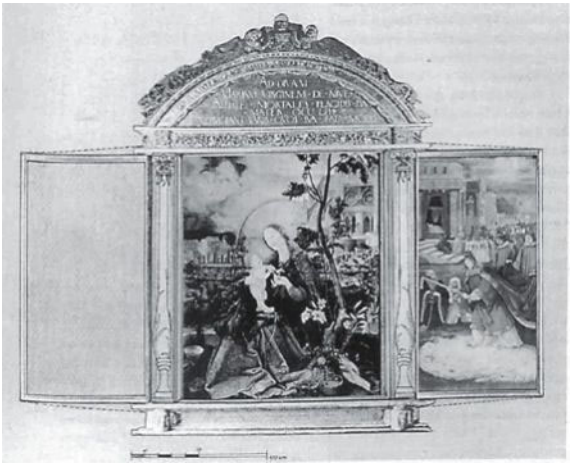

図4
グリューネヴァルト〈雪の聖母祭壇画〉再構成案（HUBACH 1996による）

図5
聖カタリナ伝の画家《ご訪問》 1480–85年ごろ、ケルン、ヴァルラフ・リヒャルツ美術館

図6
ザントラルト「ノルマンディーのニコラ・プッサン」最初のページ、TA, II.3, p. 367.

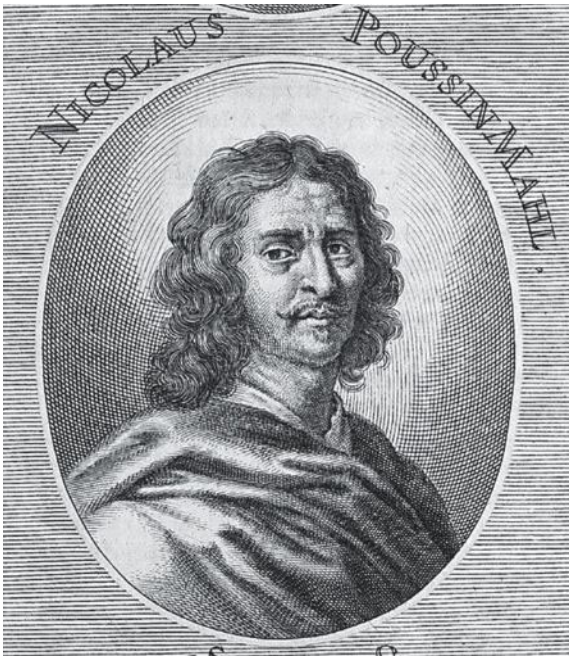

図7
R. コリン（ザントラルト下絵）《画家ニコラ・プッサン》TA, II.3, Tafel NN

図8
ザントラルト（ニコラ・プッサンの《嬰児虐殺》に基づく）《嬰児虐殺　素描》1635年ごろ、ミュンヘン、バイエルン国立図書館

図9
ニコラ・プッサン《嬰児虐殺》1625–1629年、シャンティイ、コンデ美術館